

ハンドボール競技における戦術指導の効果について

栗山雅倫^{*1}

The effect of tactical coaching in Handball

by

Masamichi KURIYAMA

Abstract

It can be seen as features of handball games, given the wealth of tactical things. So the theme of tactical and what will be a lot of training. However, the changes in training and tactical capabilities, to clarify the relationship is not easy, many do not see this article.

Therefore, in this study, it was focused on the changes of performance by the tactical coaching. Then, coaching and one of the materials was intended to. The main results are summarized in the following considerations.

- Performance caused by tactical changes in leadership, the immediate burst.
- The change in performance, differences over the level of competition is expected.
- To have tactic intent, performance and the relationship is to be inferred.

I 緒言

ハンドボール競技は、オリンピック種目でもあり、ワールドワイドな競技種目の一つであるといえる。ヨーロッパを中心とした競技人気は高く、すでに様々な発展を遂げてきている。その人気の一つの大きな要因ともあげられるのが、ゲームに見られる豊かな戦術性である。

ハンドボールゲームは歴史的に見ても、戦術的要素において大きく変遷を遂げてきた。たとえば

攻撃回数の違いに、その時代時代のゲームの様相があらわれている。無論、他の競技種目にも見られるように、ルール改正の影響によるゲーム様相の変化が大きい、ゲーム観の違いがもたらした戦術的要素の変化も少なくない。日本においても顕著な例が見られる。1997年、日本ハンドボール界に初の外国人監督として招聘された、スウェーデン人、オレ・オルソン氏は、日本のハンドボール界に大きな影響を与えた。氏は、攻撃回数のコントロールをはじめ、戦略性のあるゲーム展

* 1 東海大学体育学部競技スポーツ学科講師

開およびチーム経営を浸透させ、日本の競技力向上に大きく貢献した。戦術的な側面に関しても、新たな戦術の導入の他、従来からあった戦術に、解釈の違いを示すなど、ハンドボールゲームにおける戦術的な取り組みにおけるゲームの変化を明確に示した。

戦術的な取り組みの重要性については、多くの文献に見られる^{1,2,3)}。栗山は、戦術的能力の評価を実験的に行い、攻撃、防御のそれぞれの局面における戦術的能力の決定要因について検討し⁴⁾、平岡⁶⁾も戦術的認知能力の評価について検討している。そこでは、各局面において戦術的能力を決する要因が異なるものの、戦術的能力のトレーニングの質の高さを見出すことが出来る。

戦術的能力のトレーニングについては、とりわけ球技種目のコーチングにおいて、一般的に着目されている。しかしながら、トレーニングと戦術的能力の変化について明確に示すものは、多く見られない。このことは、今後のコーチングに関する研究の重要な課題と言えるのではないだろうか。

II 研究目的

コーチングに関する研究にとって大きな課題と思われる、戦術的能力に関する、トレーニングと戦術的能力の関係について、検討することとした。また、今回は、口頭における戦術的指導がもたらす変化について着目した。

III 方法

ハンドボールゲームに見られる、1対1局面を実験的に作りだし、口頭による戦術的指導がもたらすパフォーマンスの変化を見た。

1. 被検者

関東学生リーグ一部に所属するT大学女子ハンドボール部のコートプレイヤー6名を対象とした。そのうち2名はレギュラーメンバーより、2名は準レギュラーメンバーより、そして2名は非レギュラーメンバーから選出した。

また、被検者の攻撃相手として、同チームより無作為に5名選出した。

2. 実験設定

図1のように、1対1状況を実験的に設定し、フリースローラインを突破させないことを運動課題とし、防御を行った。攻撃者はパサーへパスをしながら突破を試みるが、パスは6回以内に限定した。各被検者は、戦術的な指示を与える前と戦術的な指示を与えた後に分け、それぞれ6人の攻撃者に対して二周りの10回、合計20試技を行った。また、一回ごとの試技間には、ある程度の休息を挟み、体力的な低下が、各試技に影響しないように促した。

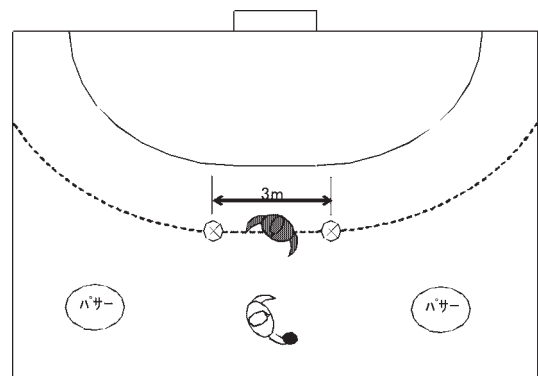


図1 実験設定

(1) 戦術的指示

各被検者10試技ずつ行った後、質問は受け付けないことを前提に、以下の戦術的指示を与えた。

「攻撃者のボールキャッチより早くストップする。その際、攻撃者の利き腕側の足を前にし、利き腕側の攻撃にはボディコンタクトをする。逆側への動きには手を添えてついていく。以上3点に特に意識を傾けること。」

被検者のレベルは異なるが、上記の戦術的指示に対する習熟度等は一切考慮せず、全被検者に同じ指示を与えた。

3. 統計処理

Wilcoxonの検定を用い、統計処理をした。

IV 結果

各被検者20試技ずつ、合計120試技を分析の対

象とした。

1. pre-test と post-test 間の相違

各被検者の pre-test と post-test の成功試技数を表 1 に示した。全被検者において、変化が見られた。

表 1 pre-test と post-test の成功試技数

		pre	post
reguler	Y.Y	8	10
	A.K	5	8
sub	M.S	3	6
	A.M	3	7
primary	M.T	3	4
	M.F	4	9

図 2 に全被検者の平均値の比較を示した。pre-test と post-test の間には、 $P < 0.05$ で統計的有意差が見られた。

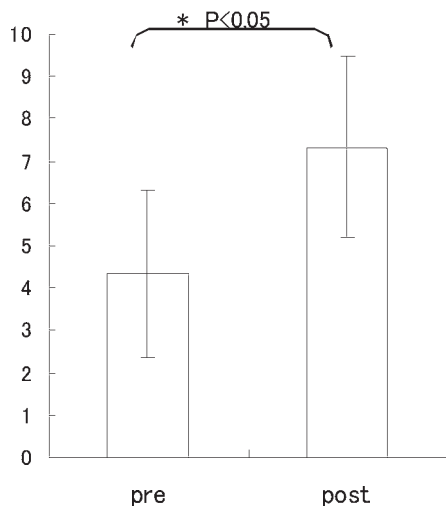


図 2 全被検者の平均値の比較

2. 群間の相違

各群の被検者数が 2 名ずつのため、統計処理は

表 2 各群の成功率の変化

reguler	65.0%	90.0%
sub	30.0%	65.0%
primary	35.0%	65.0%

していないが、各群とも同じ傾向の成功率の変化が見られた。表 2 に、成功確率の一覧を示した。

3. セット間の相違

“慣れ”や“疲労”による成功の可否への影響を検討するため、pre-test と post-test のそれぞれにおいて、1 セット目の 5 試技と 2 セット目 5 試技の成功率を算出した。(表 3) 両テストにおいて、セット間の統計的有意差は見られなかった。

表 3 5 回ずつの平均成功確率

	pre		post	
	1-5	6-10	1-5	6-10
average	50.0	36.7	66.7	83.3
S.D	16.7	32.0	24.2	23.4
	unit:%			

V 考察

【戦術的指導の影響】

実験の結果より、戦術的指導の影響による有意な変化が見られた。また、その変化は被検者間に変化の大小は見られるものの、競技レベルに関わらず見出すことが出来た。

ハンドボール競技を含む、多くの球技種目において、戦術の重要性は示されているが、ごく単純な設定において、有意な変化を生じたことにより、戦術学習の有用性をあらためて検討する価値が示された。

【戦術的意図を保持する意義】

今回の実験設定では、指導の前後の時間差が極めて短く、技術あるいは技能の劇的な変化は見込めない状況であることは間違いない。しかしながら、有意な成功確率の変化が見られたことは興味深い。

指導内容に着目してみても、ハンドボール競技では比較的に一般化されている内容であり、被検者の所属チームでは、日常的に指導される内容である。そのような状況にも関わらずこのような変化が見られたことは、受容し得る情報量の範囲内で、あらためて意図を持つことは、パフォーマンスに有効に作用することがうかがえる。すなわち

戦術的意図が整理され、意識されることは重要な意義を持つことがわかる。

さらに、競技レベルとの関係について、検討の価値のある結果が得られた。競技レベルが異なれば、技術や技能のレベルの相違をとまなう。しかしながら、いずれの競技レベルにおいても、戦術的指導をはさんで同様の变化傾向を示したことは、必ずしも技能や体力的要素に競技力が委ねられないことを示唆している。

【戦術的指導の効果の適時性】

ヤーン・ケルン⁷⁾は、より戦術的トレーニングの効果を得るための、段階をふまえたトレーニングの有用性を唱えている。すなわち効果を得るためには程度の差はあれ、ある程度の時間を要すると考えられる。しかしながら、今回の結果は、ごく短時間のうちの変化を示しており、戦術的指導による効果の即時性を支持するものであった。

一方で、中長期の段階をふまえたトレーニングの効果を否定できる要素はないことも事実である。レギュラーメンバーは、実戦の経験などは他の被検者と比較して大幅に上回っている。その意味では、今回の結果は、時間をかけて培ってきたパフォーマンス能力が、若干の情報の整理により、短時間でも変化を生じることを後押ししているに過ぎず、戦術的指導の適時性にまで言及しきれない。

【指導内容の妥当性】

今回の結果は、戦術的指導の妥当性が推察されるが、他のケースとの比較をほどこしていないため、好影響が指導内容に起因するか、もしくは情報を整理していることなのか断定することは出来ない。

提供する情報の、質と量の妥当性については、他の検討手段を用いる必要があると考えられる。

VI まとめ

競技指導現場において重要なことの一つとして、成果とトレーニングの因果関係をいかに明らかにすることがあげられる。本研究において、戦術的指導の有用性について確認することが出来たが、その因果関係の詳細については十分に明らかに出来なかった。しかしながら、戦術的指導の重要性が示唆されるが故、これからの検討課題としての価値は明らかであるといえる。今後はサンプル数の増加や、より詳細にわたる検討項目の設定により、今回不十分であった因果関係の明確化をよりはかることを課題としたい。

参考引用文献

- 1) ヨアン・クンスト・ゲルマネスク著：中村一夫訳（1981）、ハンドボールの技術と戦術、ベースボールマガジン社、pp20-25.
- 2) 大西武三・平岡秀雄・岡本研二・江成元伸編（1992）、ハンドボール指導教本、日本ハンドボール協会、大修館書店、pp52-139.
- 3) Zoltran marcinkina (1993), Playing Handball, Trio Budapest, pp219-372.
- 4) 栗山雅倫、個人施術能力評価に関する考察—ハンドボール競技「1対1局面」に着目して—（2006）、ハンドボール研究、日本ハンドボール協会、pp92-95.
- 5) 栗山雅倫・平岡秀雄、個人戦術能力評価に関する考察—ハンドボール競技、防御局面に着目して—（2008）、東海大学スポーツ医科学雑誌、東海大学スポーツ医科学研究所、pp15-22.
- 6) 平岡秀雄・栗山雅倫・花岡美智子・田村修治・野口泰博、ハンドボールの戦術的認知能力に関する評価法—攻防活動に関する状況認知と戦術的先取りを中心に—（2008）、東海大学スポーツ医科学雑誌、東海大学スポーツ医科学研究所、pp7-14.
- 7) ヤーン・ケルン著、スポーツ戦術入門（2000）、大修館書店.